

ご利用案内

開館時間 10:00～17:00（入館は16:30まで）
休 館 日 水曜日（水曜日が祝日の場合は直後の平日）
年末年始（12／28～1／4）

▼2025年6月17日(火)まで

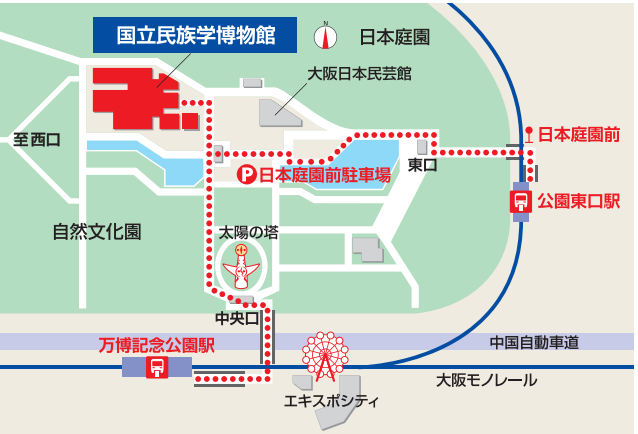
観 覧 料	本館展示	特別展「民具のミカタ博覧会——見つけて、みつめて、知恵の素」※
一 般	580(490)円	880(600)円
大学生	250(200)円	450(250)円
高校生以下	無料	無料

▼2025年6月19日(木)から観覧料を改定いたします。

観 覧 料	本館展示	特別展「舟と人類——アジア・オセアニアの海の暮らし」※
一 般	780(660)円	1200(810)円
大学生	340(270)円	600(340)円
高校生以下	無料	無料

※本館展示もご覧になれます。

- （ ）は、20名以上の団体料金、大学等の授業でご利用の方、3ヵ月以内のリピーター、満65歳以上の方（一般料金）の割引料金（要証明書等）。
○障がい者手帳をお持ちの方は付添者1名とともに、無料で観覧できます。
○大学生・一般の方は万博記念公園各ゲートで、当館の観覧券をお買い求めください。同園内を無料で通行できます。
○高校生以下の方、国立民族学博物館友の会会員の方は万博記念公園各ゲート有人窓口で、みんぱくへ行くことをお申し出いただき、通行証をお受け取りください。
○万博記念公園をご利用になる場合は、同園入園料が必要です。
○特別展観覧料については、他機関との共同主催または共同事業等によりその都度設定いたします。



交通のご案内 ◎みんぱくは、大阪・万博記念公園内にあります。
○大阪モノレール…「万博記念公園駅」「公園東口駅」下車徒歩約15分
○バス…阪急茨木市駅・JR 茨木駅から「日本庭園前」下車徒歩約13分
○乗用車…万博記念公園「日本庭園前駐車場」(有料)から徒歩約5分
○タクシー…万博記念公園「日本庭園前駐車場」まで乗り入れてきます。

お問い合わせ先 TEL.06-6876-2151 FAX.06-6875-0401

〒565-8511 大阪府吹田市千里万博公園10-1 https://www.minpaku.ac.jp



国立民族学博物館
National Museum of Ethnology

この印刷物は、環境に配慮した用紙とインキを使用しています。

本館展示

国立民族学博物館（みんぱく）は、世界の人びとの暮らしや文化にふれることができる世界最大級の民族学博物館です。世界各地の衣食住に関わる生活用具や、儀礼や信仰に用いる道具などを展示しています。



アメリカ展示



中央・北アジア展示

館内のご案内

探究ひろば 「リサーチデスク」「研究の現場から」「世界をさわる」の3つのコーナーをとおして、みんぱくの研究や展示をより詳しく知ることができます。

ビデオテーク・みんぱくシアター 世界の人びとの儀礼や芸能、生活の様子などを記録した番組を、大型スクリーンや少人数用のブースで視聴できます。

みんぱく電子ガイド 展示物をみながら、映像と音声による解説が視聴できる、携帯型の展示解説装置を無料で貸し出しています。



自動運転モビリティ(WHILL) 本館展示場内の定められた観賞コースを自動運転モビリティに乗ってご覧いただけます。本館2F観覧券売場前に「WHILLのりば」があります。



みんぱく図書室(本館3階) 文化人類学・民族学関係の文献図書資料を所蔵しています。どなたでもご利用いただけます。
休室日:日曜日、祝日(土曜日を除く)及びみんぱく休館日

ミュージアム・ショップ 世界各国の民芸品や文化人類学・民族学に関する書籍などを多彩に取り揃えています。TEL.06-6876-3112



ミュージアム・ショップ

森の洋食 グリルみんぱく 観覧の余韻に浸りながらゆっくりと本格的な洋食が楽しめます。団体様のご予約も承っております。
営業時間 11:00～16:30(ラストオーダー 16:00)
TEL.06-6310-0810



森の洋食 グリルみんぱく

国立民族学博物館友の会 『季刊民族学』の発行、友の会講演会、各種セミナーをとおして多様な文化に関する情報をお届けします。
お問い合わせ先:公益財団法人千里文化財団 TEL.06-6877-8893

■みんぱくゼミナール 研究者が最新の研究成果をわかりやすく講演します。
毎月第3土曜日13:30～15:00(開場13:00)
●場所:みんぱくインテリジェントホール(講堂) ●無料 ●申込不要
※講師・演題・開催場所は都合により変更する場合があります。
※令和7年度より8月は休会します。

第556回 4・19土 企画展関連

本田孝一の書と宇宙
相島葉月(本館 准教授) 本田孝一(アラビア書道家)
日本におけるアラビア書道の第一人者である本田孝一先生をお迎えして、このアートの魅力について語り合います。本企画展のために制作した作品や道具の解説とともに、筆遣いも披露して頂きます。



作品を解説する本田氏(マレーシア、2023年)

第557回 5・17土 特別展関連

民具のミカタ博覧会ができるまで—EEMコレクション×ムサビ・コレクション
日高真吾(本館 教授) 野林厚志(本館 教授)
加藤幸治(武蔵野美術大学 教授)
特別展で紹介しているEEMコレクションとムサビ・コレクションの概要を示しながら、民具の魅力について紹介します。



日本で伝統的に用いられてきた箱枕
(武蔵野美術大学 美術館・図書館所蔵)

ソマリアで収集された木の枕

第558回 6・21土

日本人とアラスカ先住民の接触史——江戸時代から現代へ
野口泰弥(本館 助教)
日本人には遠い世界のように思えるアラスカ。しかし、日本人は歴史的にアラスカ社会に少なからぬ影響を与えてきました。戦前・戦中期のアラスカ先住民との接触到注目しながら、日本とアラスカの関係の変化を考えます。



米国最北の村ウットウキアグヴィク(2022年)

第559回 7・19土

東アジアの婚礼と食
韓敏(本館 教授)
日本、中国、韓国などの事例にもとづいて、婚約から結婚までの過程における食べ物の流れと食べ物のとり方を比較することにより、人間が自然の恵みに与える象徴的意味を探り、文化の多様性と人間の心の共通の仕組みを考えてみます。



漢族の結婚式に欠かせない縁起のよい食べ物(瀋陽市、2017年)

第560回 9・20土 特別展関連

アジア・オセアニアの舟と人類——みんぱく舟資料からの検討
小野林太郎(本館 教授)
人類史における舟の出現と利用は、私たちホモ・サピエンスの誕生以降といわれます。本講演では本館の舟資料よりアジアやオセアニアの舟と人類の歴史や共通性、地域性について考えます。



クラカヌーによる航海の様子
(ババアニューギニア、2011年、門田修撮影)

みんぱく
カレンダー

2025
4—9
Apr. Sep.



国立民族学博物館
National Museum of Ethnology

民具のミカタ博覧会 ―見つけて、みつめて、知恵の素

民具とは、わが国において、日常生活に必要なものとしてつくられ、使用されてきた造形物です。これらの民具は、研究者が旅をし、さまざまな地域の生活文化と出会いながら収集されてきました。本特別展では、民具の射程を日本から海外にまで広げ、くらしのなかの美の造形としての民具を紹介します。



豆腐や魚を買って運んだ取っ手付きの籠
(武蔵野美術大学 美術館・図書館所蔵)



マレーシアで
収集された
狩獵神の像



甕に似せて作られた
八重山地方の穀物入れ
(武蔵野美術大学 美術館・図書館所蔵)

ウガンダで収集された
S字状の刃を持つ鎌

直接火に掛け、
お湯が沸せる陶製の土瓶
(武蔵野美術大学
美術館・図書館所蔵)

関連イベント

- 公開シンポジウム 3・30(日) コレクションの系譜学
4・13(日) Doing TSUNEICHI『忘れられた日本人』を読み直す
- ウィークエンド・サロン 4・6(日) 4・27(日) 5・25(日) 6・1(日)
- ワークショップ 5・4(日・祝) じっくり観察！民具に探る『デザインの素』
5・5(月・祝) 民具の4コママンガを作ろう
- みんなくゼミナール 5・17(土) 民具のミカタ博覧会ができるまで
―EEMコレクション×ムサビ・コレクション

舟と人類 ―アジア・オセアニアの海の暮らし

本特別展は、海域アジアやオセアニアにおける多様な船やカヌー、海での暮らしと密接に関わる漁具などの物質文化について、人類史的な視点から展示し紹介します。

関連イベント

- ウィークエンド・サロン 9・14(日) 10・5(日) 11・23(日・祝)
- みんなくゼミナール 9・20(土) アジア・オセアニアの舟と人類―みんなく舟資料からの検討
11・15(土) 浮かぶ、走る、閉じこめる―乗りものとしての舟、船舶
- 研究公演 9・27(土) マオリの伝統芸能、カパハカの紹介と公演 ―ナ・ホウ・エ・ファ
(Ngā Hau E Whā)
- みんなく映画会 11・29(土) 『チエチエメ二号の冒険』(1976年、日本) (対談付き)

その他、ワークショップなども予定しています。



蘭嶼島の沿岸に並ぶタタラ舟の風景
(台湾、2011年、門田修撮影)



チチカカ湖の董（あし）舟 (2024年、宮原千波撮影)



クラカヌーによる航海の様子
(バブアニューギニア、2011年、門田修撮影)

2025	④							⑤						
日	月	火	水	木	金	土		日	月	火	水	木	金	土
			1	2	3	4	5					1	2	3
6	7	8	9	10	11	12		4	5	6	7	8	9	10
13	14	15	16	17	18	19		11	12	13	14	15	16	17
20	21	22	23	24	25	26		18	19	20	21	22	23	24
27	28	29	30					25	26	27	28	29	30	31

⑥							⑦						
日	月	火	水	木	金	土	日	月	火	水	木	金	土
1	2	3	4	5	6	7							
8	9	10	11	12	13	14	6	7	8	9	10	11	12
15	16	17	18	19	20	21	13	14	15	16	17	18	19
22	23	24	25	26	27	28	20	21	22	23	24	25	26
29	30						27	28	29	30	31		

⑧							⑨						
日	月	火	水	木	金	土	日	月	火	水	木	金	土
					1	2					1	2	
3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16
17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30
31													

— 特別展 — 企画展 — 友の会講演会 — みんなくウィークエンド・サロン — 休館日

点と線の美学 ―アラビア書道の軌跡

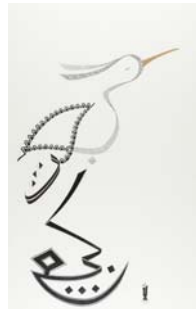
アラビア書道はアラビア文字を美しく書く手法を追求する芸術です。中東・イスラーム世界に限らず、日本や欧米においても、書に魅了された人々が千年の伝統と真摯に向き合い作品を制作しています。本企画展では日常を彩る製品をデザインする「技術」であったアラビア書道が、「芸術」として再定義された軌跡をたどります。



乳製品店のチラシ (エジプト)



サラフ・アブドゥルハーレク作
「アッラー以外に神はなし」
(2015～16年) クーフィー書体



イザベラ・ウフマン作「再生」
(2022年)

関連イベント

- ウィークエンド・サロン 3・23(日) 4・13(日) 5・4(日・祝) 5・11(日) 5・18(日)
- ワークショップ 3・29(土) アラビア書道とははじめ―やってみよう筆づくり
5・18(日) アラビア書道とははじめ―書いてみよう点と線
- みんなくゼミナール 4・19(土) 本田孝一の書と宇宙
- みんなく映画会 6・8(日) 上映作品『フォトコピー』(2017年、エジプト)

■ みんなくウィークエンド・サロン ― 研究者と話そう

●日曜日開催 14:30～(30～60分) ※都合により予定を変更することがあります。

●場所：本館展示場ナビひろば他

●要展示観覧券 ●申込不要

みんなくの研究者が「みんなくの展示資料」「調査している地域(国)の最新情報」「現在取り組んでいる研究」について分かりやすくお話しします。



フォルモサ∞アート 台湾原住民族芸術の今〈仮〉

オーストロネシア系先住民族の台湾原住民族は、口承や歌謡、衣服や道具の造形を通して自らの文化を伝えてきました。その営みは現在、大地と大海原の聲を聴き、森羅万象の生命を尊び、美を解放する原住民族アートとしても関心を集めています。伝統の継承を重んじながら、新たな創造の営みに取り組む芸術家たちの作品を紹介します。



イタン・バヴァヴァロン作
「土地と太陽の子(土地と太陽の子)」(2009) [部分]



イタン・バヴァヴァロン作
「天地之間 風吹動(天地の間 風が吹く)」(2021) [部分]

関連イベント

- みんなくゼミナール 10・18(土) 台湾原住民族アート史
- ウィークエンド・サロン 10・19(日)

■ みんなく映画会

- 場所：みんなくインテリジェントホール (講堂)
- 事前申込制 (先着順)
- 要展示観覧券

人もモノもうつろいゆく時代に、点と線は変わらぬ価値を描く

上映作品『フォトコピー』

6・8日 13:30～16:00(開場13:00)

大手出版社の植字工を退職したマフムードはコピー屋を営み静かに暮らしていました。大学生に代筆を依頼されたレポートより、恐竜が自然環境の変化に適応できずに絶滅したことを知り衝撃を受けます。恐竜の絶滅についてもっと知りたいという思いから、新しいテクノロジーと向き合う決意をし、新しい生き方を模索します。

映画「フォトコピー」のポスター (英語版)



■ 研究公演

- 場所：みんなくインテリジェントホール (講堂)
- 事前申込制 (先着順)
- 要展示観覧券

マオリの伝統芸能、カパハカの紹介と公演

9・27± 13:30～15:40 (開場13:00) ― ナ・ホウ・エ・ファ(Ngā Hau E Whā)

「カパハカ」の起源は、「ハカ」(戦闘)、両端にボールがついた紐を用いて演じられていた「ポイ」、嘆きの唄「モテアテア」などにあります。植民地化される以前にあった日常的な行為が、今日見られる「カパハカ」へと進展しました。本公演では専門家による解説や参加型のパフォーマンスも用意し、オセアニアの芸能文化を体験していただきます。



ナ・ホウ・エ・ファによる
ハカの公演風景

展示や催しの最新情報は、ホームページをご覧ください。

表紙：ウガンダの酒席で用いられる酒壺 K0006728